

Newsletter of Japanese Coral Reef Society

日本サンゴ礁学会ニュースレター

2021年2月

contents

page

日本サンゴ礁学会第23回大会報告

2

各賞受賞者の声

3-4

オンライン企画報告

5

自由集会報告

6

小中高生ポスター開催報告

6



日本サンゴ礁学会第23回大会報告

第23回大会 実行委員長 山野 博哉（国立環境研究所）

2020年の新型コロナウイルスの大流行で、世の中は大きく変わりました。学会も例外ではなく、各学会の大会は基本中止あるいはオンラインでの開催となり、サンゴ礁学会第23回大会についても、当初は石垣島での現地開催だったはずが6月の理事会でオンライン開催とすることが決定されました。大会実行委員会は理事会と理事会が依頼した方々（中村隆志さん、北野裕子さん、熊谷直喜さん）が引き継ぎました。オンライン大会運営の前例の無い中で、準備を進めて下さった実行委員会の方々、そして大会に参加下さった方々に厚く御礼申し上げます。

日本サンゴ礁学会第23回大会は2020年11月21日～23日にオンラインで開催されました。今回はオンライン大会の試行という要素もあったため、参加費は一般会員は1000円（9月23日まで、それ以降1500円）、非会員は1500円、（同3000円）、学生会員や海外会員は無料としました。また、運営は今後の負担を考えてなるべく簡素化し、テーマセッション、英語セッション、公開シンポジウム、懇親会を無くし、発表形式は一般口頭発表とポスター発表に加えて自由集會を基本としました。一方で、なるべく広く参加していただくよう、ポスター発表においてはNPOポスターと小中高生ポスターの募集を例年通り行いました。また、オンラインの強みを活かして、オンライン企画を自由に提案していただくこととしました。そして、例年の表彰式に加えて、会員の方々と広く意見交換する意見交換会を設けました。

口頭発表、自由集會、オンライン企画、表彰式、意見交換会にはZoomを用いました。Zoomは多くの方々が大学の授業などで慣れている印象があり、私自身も会議でよく使っていたので基本的な心配はありませんでしたが、ウェビナーにするかミーティングにするかは少し迷いました。結局、参加者の名前が見える方が良いと判断しZoomのミーティングを採用しました。ポスター発表に関しては、いくつかのシステムを検討した結果、SpatialChatが最もポスター発表の場を再現できていると判断し採用しました。SpatialChatに関しては他に使用例が無く、手探りながら事前のアナウンスを早めにし、先方との直接打ち合わせやデモによる確認を行うなど、入念に準備を行いました。ZoomとSpatialChatのホストは私が担い、北野さんとともに国立環境研究所内に大会事務局を設置しました（写真1）。

大会の内容は、口頭発表40件、ポスター発表33件、自由集會2件、オンライン企画3件となりました。登録者数は170名でした。幸い大きなトラブルは無く無事終了しました。通常の大会に比べるとやや小ぶりとなりましたが、口頭発表が1会場でできたことや、オンラインならではの企画ができたことなど、いくつかのメリットはあったのではないかと思います。口頭発表には70-90名、ポスター発表には50-70名の方々が参加されました。また、意見交換会では、大会のみならず今後の学会運営についても意見をいただくことができました。

大会期間中の大会事務局の出来事や今後の課題をいくつか。1日目朝には停電により使用予定の建物のネットが落ちていることがわかり、急遽別の建物の会議室を手配し、代議員総会の開始に何とかギリギリ間に合いました。2日目には、停電は回復して朝から当初の予定通り大会を開始しましたが、夕方に茨城県で地震があり、これも停電が心配されましたが事なきをえました。このような冷や汗をかくことがありましたが、後半は、懇親会をオフィシャルにやっても良かったかなと思うぐらいの余裕ができました。実はSpatialChatでは談話室を準備し、談話や懇親会をやりたい方

はどうぞお使い下さいと事前にお知らせしていましたが、利用は残念ながらほぼ皆無で、なかなかオンラインでの交流というのは慣れの問題もあって敷居が高いのかもしれませんが。

大会後にアンケートをとらせていただき、65名の方から回答をいただきました。アンケート結果の一部を図1でご紹介します。幸いにも今回のオンラインの大会は全体的には好意的にとらえていただけたようですが、ポスター発表にはやや課題があるように思われます。アンケートでは参加者どうしの交流を望む声もあり、オンラインでのポスターや交流は次回以降の課題になるかと思えます。アンケートの詳細は学会ウェブサイトでご公表予定です。次回の大会は、再び石垣島で準備をしていただいていたのですが、新型コロナウイルスの状況を考えて、オンラインとすることが後に決定されました。状況が許せば、ハイブリッドでの開催も含め検討いたしますが、今回の経験を活かし運営を行いたいと思っています。



写真1：大会事務局の様子。余裕がでてきてサンゴDanceを踊ろうとしているところ（難しくてうまく踊れなかった）。北野裕子撮影。

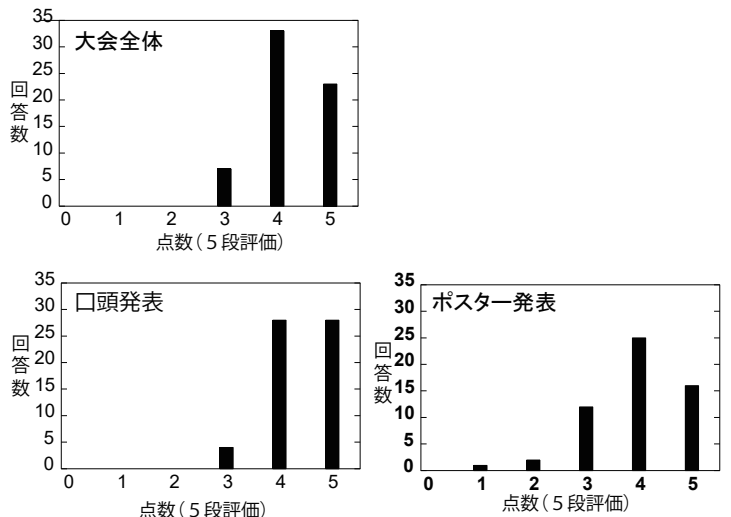


図1：アンケートによる今回の大会の評価の一部。5段階評価をしていただいた（5が良い）。

日本サンゴ礁学会 川口奨励賞受賞者報告 / 深見 裕伸 賞委員会委員長

Congratulations!

受賞者：藤井 琢磨 (鹿児島大学)

受賞タイトル：「琉球列島におけるスナギンチャク目等底生生物の多様性解明」

授与理由

藤井琢磨会員は、スナギンチャク目の分類研究、およびサンゴ礁域に生息する生物地理学的な研究を行っており、研究業績も35編(うち第一著者が9編)あり、審査員全員から優れた業績を挙げていると評価を受けました。また、転石や礁壁の間隙、内湾砂泥底など、これまで学術的に注目されにくい環境での一連の研究は、独創的な着想力と、それを結果につなげることができる技能によって成し遂げられたものであることが評価されています。奄美群島海域や沖縄県大浦湾における生物多様性に関する一連の研究に関して、講演や地元メディアを通しての普及・啓蒙実績も非常に高い評価でした。その他、日本サンゴ礁学会における運営面でも非常に大きな貢献をしているとの評価を受けました。

以上、総合的に判断した結果、研究業績および普及活動に関して素晴らしい成果を上げており、今後の活躍も大いに期待されることから、藤井琢磨会員を日本サンゴ礁学会川口奨励賞にふさわしいと判断しました。

受賞者のあいさつ

なんの気なしに訪れたサンゴ礁で目にした生き物や環境の多様さ、面白さに心を奪われ、はや15年。サンゴ礁生物多様性が如何にして成り立っているのか探求し、その楽しさを共有できる“なかま増やし”に生き甲斐を感じ、地域に根差した研究・教育を心掛けて今日に至ります。

この度、栄誉ある賞を賜り、大変、光栄に感じます。私を研究の世界に誘い、今日に至るまで良き指導者、共同研究者としてご支援いただいている琉球大学のJames Davis Reimer先生と研究室関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。また、取り留めなく広がる私の興味に対して、時に厳しいご意見をくださり、時にフィールド調査にご一緒させてくださる共同研究者の皆さまなくしては、私の研究は成り立ちませんでした。さらに、私が本賞を頂いたということは、各地域における地元協力者に対しても同じく評価を頂いたと理解しています。特に、沖縄県大浦湾におけるダイビングチームすなわくスナフキンとしての活動は、生物多様性の奥深さを体感し、基礎研究を続ける転機となりました。奄美やトカラなど薩南諸島域での活動は、奄美市、奄美海洋生物研究会、瀬戸内町海洋生物研究所ほか、不本意ながら本稿では挙げきれない多くの方々のご協力なくしては成り立ちませんでした。今後、どこでどのような活動を続けられるのかわかりませんが、皆さまへの感謝と初心を忘れず、サンゴ礁およびその周辺生態系における生物多様性の魅力を探求し伝え続けられるよう、なお一層精進していきたいと思っております。



教育普及活動、島でのサンゴ礁観察会にて

日本サンゴ礁学会 保全奨励賞受賞者報告 / 藤田 喜久 サンゴ礁保全学術委員会委員長

Congratulations!

活動実施団体：サンゴマップ実行委員会 (代表 山野 博哉)

活動名：「日本全国みんなでつくるサンゴマップ」

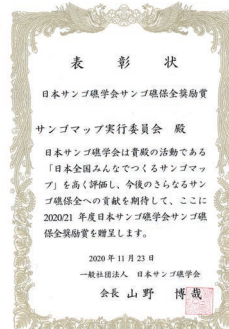
授与理由

「日本全国みんなでつくるサンゴマップ」は、シュノーケラーから専門家までの幅広い主体から投稿された観察記録や投稿写真を、マップ上にすぐに関連できる仕組みになっています。また、「素人でも簡単に投稿できる」が、「科学的なデータとしても使える」という一見相反する条件が両立するよう工夫された独自のデータベースシステムが構築されています。一連の活動は12年に及んで継続されており、作られたマップを介して、一般の方々が行政や学術等諸機関と連携して保全活動に関わる機会を創出してきました。これらの成果は、学会発表や論文発表等にまで生かされており、シティズンサイエンスの先駆けともいえる内容であるとして、審査員からも高く評価されました。実際の地域への波及や情報発信に関する活動をさらに進めることで、この活動がもつポテンシャルの高さを活かすこともできるため、さらなるサンゴ礁保全への貢献を期待して、サンゴマップ実行委員会による活動がサンゴ礁保全奨励賞にふさわしいと判断しました。

受賞者のあいさつ

このたびは、「日本全国みんなでつくるサンゴマップ」がサンゴ礁保全奨励賞を受賞し大変嬉しく思っております。「日本全国みんなでつくるサンゴマップ」は日本全国のサンゴの状況を知るためのプロジェクトです。この活動を推進する「サンゴマップ実行委員会」は、2008年の第2回国際サンゴ礁年を機に、科学者、教育者、ダイビング業界、NGO関係者など多様な主体が集まり発足しました。スノーケリングやダイビングを楽しむ方々から専門家までの幅広い活動主体によるサンゴの観察記録や写真をwebサイト(https://www.sangomap.jp)へと投稿していただき、どなたでもサンゴの観察記録をマップ上で閲覧できるように構築しています。サンゴ観察情報を簡単に投稿・集約できるだけでなく、科学的なデータとしても活用できるように構築しました。活動は12年継続されており、作られたマップを介して、一般の方々が行政や学術等諸機関と連携して保全活

動に関わる機会となるよう手助けし、webベースの市民科学としても貢献していると考えております。成果は論文としても公表され、国際サンゴ礁年2008の報告「The Year in Review」に取り上げられました。システムはスマホ対応など少しずつ改良しており、今後も、何か異変があったときにその情報を投稿できるプラットフォームとして、細く長く活動を継続し、成果をサンゴ礁保全へとつなげていきたいと考えております。最後になりましたが、情報をご提供下さった皆様に深く感謝いたします。



賞状



「日本全国みんなでつくるサンゴマップ」ウェブサイト

最優秀口頭発表賞 受賞者報告

受賞者：谷中 絢貴（宮崎大学農学工学研究科）

受賞タイトル：「インド-西太平洋におけるアオサンゴ属 (*Heliopora* spp.) の系統地理学的パターンと種分化の考察」

受賞者の声

この度は、私達の研究「インド-西太平洋におけるアオサンゴ (*Heliopora* spp.) の系統地理学的パターンと種分化の考察」を、最優秀口頭発表賞に選出いただき大変光栄に存じます。

本研究では、インド太平洋各地で多様な成長形態を示すアオサンゴ属を対象に、広域サンプリングとMIG-seq法によるゲノムワイドSNPsを用いた系統解析を実施した結果、既知の2種 (*H. coerulea*, *H. hiberniana*) とは遺伝的・形態学的に異なる新たなアオサンゴ属の種 (*Heliopora* sp.) を発見しました。これら3種の遺伝分化には異所性の他、同所的に生息する場合には生殖時期

の違いや生態学的な適応分化をしており、様々な種分化パターンにより形成されたことがわかりました。さらに各3系統の中にはさらに強い遺伝分化したサブクレードが存在することが示唆されました。

尚、命名規約に関する私達の勉強不足により、本発表時に発表要旨及び発表スライド中で勝手な新種名を公表してしまつたことに関して、多くの皆様を混乱・困惑させてしまいました。深くお詫び申し上げますとともに、ご指摘・ご助言下さった方々には感謝申し上げます。本発表で使用した種名は一度、放念いただけますと幸いです。



優秀ポスター賞受賞者報告

受賞者：土屋 考人（東京大学 大気海洋研究所）

受賞タイトル：「造礁サンゴ、ココビミドリイシのゲノムワイドSNPを用いた南西諸島における集団構造解析」

受賞者の声

この度は最優秀ポスター賞にご選定いただき、誠にありがとうございます。

本研究ではココビミドリイシ *Acropora digitifera* を用いた集団構造解析を行いました。近年の気候変動によってサンゴ礁を取り巻く環境は大きく変化しつつありますが、そのような環境変化に対するサンゴ集団の挙動を予想する上で、サンゴの集団構造に関する情報は必要不可欠です。このような背景から、我々は219群体のココビミドリイシから得られた300万箇所以上の一塩基多型 (SNP) を用いて、地点ごとの遺伝的な特徴を調べました。その結果、1000 km 以上離れた地点間で遺伝的な類似性

が確認されるなど、ココビミドリイシにおいてこれまで知られていなかった複雑な集団構造を明らかにすることができました。今後はこのような集団構造がどのような要因によって生じたのかを明らかにするために、地点ごとの個体群動態や地点間の遺伝的交流の方向性について解析を進めていきたいと考えています。また、全ゲノムデータの特性を最大限に生かし、それぞれの地点の環境への適応を可能にする遺伝的な機序についても調べていきたいと考えています。最後に、本研究を進めるにあたってご指導・ご協力いただいた共同研究者の皆様へ深く感謝申し上げます。



受賞者：寺山 玲美（国際基督教大学・筑波大学 下田臨海実験センター）

受賞タイトル：「サンゴにおける熱ストレスを緩和する戦略としての光阻害」

受賞者の声

この度は最優秀ポスター発表賞に選定いただき、大変幸甚に存じます。

近年海水温上昇が問題となっています。熱は褐虫藻のもつルビスコを破壊し、破壊されたルビスコへの過剰なエネルギーの流入は有害な熱や活性酸素種の発生を引き起こします。また、強光下では光阻害が起こります。光阻害は負の影響をもたらすように思えますが、熱ストレス下では受け取る光エネルギーを減らすことで破壊されたルビスコに流れ込むエネルギー量を減らし、活性酸素種の発生を防ぐのではないかとこの仮説を本研究で検証しました。

実験には酸素マイクロセンサーとPAMを用い、総光合

成量と光合成収率を求めました。高光量下では総光合成量は増えますが、光阻害が起こっているために光量の上昇に対する光合成量の増加は少なくなりました。これは受け取る光エネルギーを減らすためだと考えられます。さらに、熱ストレス下では光阻害を強め、取り込むエネルギー量が減ることが明らかになりました。今後は研究を進め、活性酸素種の生産量も求めたいと考えています。より詳細なサンゴと褐虫藻の関係を知るべく、今後も精進してまいります。

末筆ながら、多大なるご指導、ご支援をくださっている先生方に御礼申し上げます。



受賞者：山極 広孝（琉球大・理工）

受賞タイトル：「沖縄島中城湾における1975-1976年から2020年にかけての造礁サンゴ群集変遷についての生態学的調査」

受賞者の声

この度は、最優秀ポスター発表賞にご選出頂き誠にありがとうございます。

沖縄島中城湾では、開発に伴う埋め立てや浮泥の堆積、水質汚濁等の人為的攪乱が起きています。本研究は、1975-76年に行われた調査と同じ地点を再調査し、45年間で中城湾の造礁サンゴ群集がどう変遷したのかが明らかにする事を目的としました。

結果は、中城湾の造礁サンゴは過去と同程度の多様性を維持していました。サンゴの形状は、熱ストレスや環境変化に強い、被覆状や塊状サンゴの優占度が高くなっていました。そして浅瀬のサンゴは深場へ、深場のサンゴは浅瀬へ遷移する、リーフコンプレッションが起きたことが示唆

されました。以上の事から、45年間で中城湾の造礁サンゴは環境変化へのストレス耐性が強い生物相へと変化しつつあり、海面温度上昇や紫外線量増加、濁度の上昇等の環境変化が起きてきた可能性が考えられます。

中城湾の造礁サンゴは人為的攪乱が起きている環境に適応し、環境ごとに適した生物相へとシフトし、沖合ではサンゴ被覆50%を超える地点も残っています。今後も更なる調査や環境保全を行っていく価値がある海域です。

本研究は、公益財団法人水産無脊椎動物研究所の個別研究助成により実施されました。また本調査を行うに際しご協力頂いた、マリンスペースの中小路さんに感謝の意を表します。



JCRS23 オンライン企画報告

オンライン企画①

企画名: 踊ってみよー! さんさんサンゴ Dance ダンス!

オーガナイザー: コーラル・ネットワーク 宮本 育昌

私たちはサンゴ礁保全の普及啓発として、写真・パネル展示、セミナー・シンポジウム、サンゴ礁の生き物塗り絵/消しゴムスタンプカード/缶バッジ作り、サンゴ骨格染めハンカチ作りなどを行い、一定の成果を得てきました。その一方で、環境イベント等の出展では元からサンゴ礁に興味がある方やそのお子さんの参加が多く、新しい層にアプローチできていないという悩みがありました。

そこで、サンゴ礁になじみがない方にも参加してもらえるインパクトがあるイベントとして、プロダンサーのmimoさんと企画したのが、この「さんさんサンゴDanceダンス!」です。沖縄県サンゴ礁保全推進協議会の2019年度サウジアラムコ沖縄サンゴ礁保全活動支援基金助成事業の採択により、きいやま商店の「1、2、サンゴー!」の編曲、オリジナルの振付・衣装の作成、石垣島・沖縄本島(沖縄市・那覇市)での講習会を行えました。さらにSNSでの拡散などにより、のべ約1万人の方に踊っていただけました。

今回、日本サンゴ礁学会の皆様にもぜひ踊っていただきたいと考え、オンライン企画を登録しました。実は直前まで参加申し込みが一桁だったので、講師のmimoさんとかなり気楽に準備していたのですが、蓋を開けて



みんなで楽しく踊った後、振付のサンゴポーズで記念写真を撮りました!

みると35名以上の方が参加してくださり、びっくりすると同時に大変嬉しかったです。画面の中で皆さんが楽しそうに踊っているのを見て、「企画して良かった」と感じています。

より多くの方にサンゴ礁に親しんでもらえるよう、今後もこの活動を広めていきます。皆様も、YouTube、Facebook、Instagramの公式ページを検索・拡散すると共に、ぜひ踊って楽しんでください!

オンライン企画②

企画名: サンゴ礁の研究室をオンラインで訪ねてみよう

オーガナイザー: CRS教育・普及啓発委員会 [北野 裕子 (国立環境研)・山崎 敦子 (九州大)・中島 祐一 (沖縄科学技術大学院大学)]

開催日時: 2020年11月22日16時15分~17時45分

学会大会初のオンライン大会ということで、その利点を生かして小中高生を中心に日頃大会に参加されない方も対象にして本企画を開催しました。参加者の年齢層が幅広く、小学生から社会人に至るまで約60名の方々に参加していただくことができました。最年少の参加登録者は小学1年生でした。5名の先生からそれぞれの研究内容を紹介していただきました。中村隆志先生からはサンゴ礁の将来予測のためのモデリング、高橋そよ先生からはサンゴ礁に生きる漁師の生業と自然認識、日高道雄先生からはサンゴの年齢や寿命、安田仁奈先生からは温暖化とサンゴの分布拡大の関連性、渡邊剛先生からはサンゴ化石からの過去の気候と環境の復元について伺うことができました。いずれの研究内容も、失われつつあるサンゴ礁の現状や未来を知る上で重要で、参加者にはサンゴ礁を軸とした異なる分野の話一度に聞けるまたとない機会となりました。その後、参加者が参加登録時に記入したサンゴ礁に関する質問に先生が回答を行いました。チャットで参加者から先生への質問がリアルタイムで投稿され、双方向のコミュニケーションによる活発な企画になりました。終了後のアンケートでは、参加者からサンゴの研究をしてみたいという声が聞かれ、この企画をきっかけに将来

✉ yuichi.nakajima @ oist.jp

サンゴに関わる人材が育つかもかもしれません。今後もオンライン企画を行う機会があれば、参加者にサンゴ礁をもっと身近に感じてもらえることでしょう。寄せられた質問と回答については、当日時間切れで先生が答えきれなかった分も含めて特設サイト (<https://sites.google.com/view/jcrs23>) に掲載しています。(文責: 中島)



オンライン企画③

企画名: モーリシャス貨物船座礁事故

オーガナイザー: 山野 博哉 (国立環境研究所)

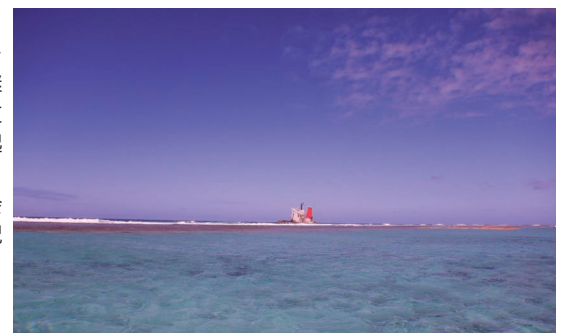
2020年7月25日に、貨物船Wakashioがモーリシャスのサンゴ礁に座礁し、8月6日に総量約1000tの重油が流出しました。この座礁と重油流出の状況を受けて、日本政府は国際緊急援助隊専門家チームを組織し、生態系への影響把握に関する現地での活動を行いました。

本セッションはJICAの許可のもと緊急に企画され、派遣された専門家からの発表がなされました。宮城豊彦氏(東北学院大名誉教授)にマングローブに関する発表を準備していただきましたが、宮城氏がちょうどモーリシャスに派遣中であり、発表ができなくなったため山野が代理で発表しました。

最初に、牧秀明氏(国立環境研究所)が、これまでの油流出事故を振り返り、油流出事故がサンゴ礁域での脅威となりうることを述べました。その後山野がモーリシャスの状況について、重油によるサンゴへの直接の悪影響は観察されませんが、Wakashio近傍の海水の濁りが大きく、ごく一部ではあるが細粒物が堆積してサンゴが死んでいることを示しました。また、マングローブに関しては、一部重油が漂着しており、まだ回収されていないことを示しました。いずれも、長期的なモニタリングを継続して行った上で保全や再生計画を立てる必要があります。発表の後、同様に派遣さ

れた羽井佐氏(環境省)から全体の対応に関して、渡邊敦氏(海洋政策研究所)から今回の事故の海洋政策上の課題に関してコメントをいただきました。

本セッションには70名以上の参加をいただき、関心の高さが伺われました。現在もモーリシャス政府と専門家によるモニタリングが継続中であり、支援の動きも起こりつつあります。今後も機会を見つけて状況を報告したいと思えます。



座礁したWakashio船橋部 (©JICA)

自由集会報告

自由集会①

タイトル: サンゴ礁保全に関わる最近の国内外の動向について (主催 サンゴ礁保全学会)

オーガナイザー: 藤田 喜久 (サンゴ礁保全学会・委員長: 沖縄県立芸術大学) [✉ fujitayo@okigei.ac.jp](mailto:fujitayo@okigei.ac.jp)

宮本 育昌 (コーラル・ネットワーク)

2020年は、「生物多様性のスーパーイヤー」と言われ、生物多様性保全やサンゴ礁生態系保全を推進する上で重要な年となる予定でした。しかし、ご存知のように、新型コロナウイルス感染症の拡大およびその拡大防止措置により、様々な活動に制限を強いられることになりました。

しかし、「現場での活動」は制限されるものの、サンゴ礁保全に関するこれまでの諸活動を振り返り、国内外における現在の動向を共有し、今後の活動展開を考える良い機会になり得るとの考えから、サンゴ礁保全学会を中心に自由集會を企画することになりました。

2020年11月22日に開催された本集會では、宮本育昌氏(コーラル・ネットワーク)に「サンゴ礁保全に関する国際動向」、山野博哉氏(国立

環境研究所)に「サンゴ礁生態系保全行動計画の成果と改訂に向けて」、佐々木哲朗氏(小笠原自然文化研究所)に「世界自然遺産小笠原のサンゴ礁保全の現状」の話題を提供いただきました。

本集會が「やや堅い(難しい)」内容であることと、日曜日の18:00-19:30という開催時間帯から、参加者が集まるか不安でしたが、実際には、当日参加を含めて50名の参加者があり、大変盛況でした。各講演内容に関連した議論も活発で、改めて本学会員のサンゴ礁(生態系)保全への関心が高いことを確認することができました。また、所定の開催時間後も、SpatialChatに会場を移して夜遅く(22:00過ぎ!)まで議論は続きました。

後日談ですが、サンゴ礁保全学会では、



写真: 自由集會への参加者 (公表を承諾済みの参加者のみ表示)

本自由集會での議論を経て、「政策提言ワーキンググループ」を立ち上げ、現状でもできるサンゴ礁保全のための取り組みを進めています。

自由集会②

タイトル: 喜界島サンゴロジ

オーガナイザー: 駒越 太郎 (喜界島サンゴ礁科学研究所) [✉ komataro@kikaireefs.org](mailto:komataro@kikaireefs.org)

渡邊 剛(北海道大)・山崎 敦子(九州大)

サンゴ礁というフィールドには多様な分野の人が集まります。奄美群島・喜界島に拠点をおく喜界島サンゴ礁科学研究所(以下サンゴ研)では、サンゴ礁にまつわる学際的な学問分野を“サンゴロジ”と称し、活発な共同研究を推進しています。この自由集會では、喜界島を舞台に研究を発展させるため、開催しました。

はじめに北海道大学の渡邊 剛先生から、サンゴ研の“サンゴロジ”の中核をなす「MIRAIプロジェクト」について紹介がありました。100年後の未来を見据え、サンゴ礁に関わる人が残していくべき共通する価値は何なのか、自然科学

と人文科学の視点から追求するものです。これを踏まえ、北海道大学 西村裕一先生からは「サンゴ礁海岸と地震・津波」、鹿児島大学 高宮広土先生からは「奄美・沖縄諸島における『島嶼環境』とヒト(Homo sapiens)」というテーマでそれぞれご講演いただきました。ご講演の詳細は、サンゴ研機関誌に掲載予定です。

最後は、質疑応答を中心に『災害や環境にサンゴ礁の上に住むヒトがどう応答してきたか』『自然環境と人間生活・文化の関係がどのように変化してきたか』など幅広いテーマで議論が展開されました。今後もサンゴ礁に集まる多くの方々



2018年にインドネシアのクラカタア火山の噴火に伴い、約10mの津波に襲われたウジョン・クロン国立公園の海岸(西村裕一氏提供)

とともにサンゴロジを発展させ、学際的な研究の推進や100年後に残すべき価値を考えていきたいです。

小・中・高生サンゴ礁研究ポスター発表報告

担当: JCRS教育・普及啓発委員会 [山崎 敦子・北野裕子・中島 祐一] [✉ yuichi.nakajima@oist.jp](mailto:yuichi.nakajima@oist.jp)

今大会での小中高生によるサンゴ礁研究ポスター発表は一般ポスター発表と同様にSpatialChatを利用した発表となりました。今回は急遽オンライン開催となったことで十分な告知期間がとれませんでした。2件の意欲的な応募がありました。1件は喜界島サンゴ礁科学研究所の7名による、現生と化石のサンゴ骨格の比較から化石のサンゴが生きていた当時の環境を推測した、地球化学的にも古生物学的にも重要な内容でした。もう1件は八重山高校の5名による、サンゴの色と光合成量を比較した、サンゴの生存とサンゴ礁の存続に重要な内容でした。2件ともユニークでレベルの高い発表でした。

教育・普及啓発委員会としては小中高生が

SpatialChatを使いこなせるかを危惧しましたが、研究を支援してくれた関係者のサポートもあり、発表者全員が一生懸命かつスムーズに発表していました。ポスターに訪れた先生の質問にも発表者間で連携して回答しており、連帯感の高さが素晴らしい成果につながったようでした。学会員からの講評もオンラインで行い、両発表とも講評者13名から高評価を得ました。発表者には講評内容と参加証明書をお送りしました。来年度大会における小

中高生ポスター発表の詳細は決まっていますが、今大会よりも発表グループが増え、さらに盛り上がることを期待しています。会員の皆様の協力が不可欠な企画ですので、今後もよろしくお願いいたします。(文責: 中島)



喜界島サンゴ礁科学研究所発表者のポスター前での集合写真



ポスター作成中の八重山高校発表者の様子(コーラルバンク代表・小林鉄郎氏提供)

編集後記

オンライン学会大成功でしたね!でも、リアルな人の反応、気配を実際に感じる事が大切だと思うこの頃です。来年、再来年?の生ライブ開催を心待ちにしております。 広報編集者担当: 湯山

JCRS Japanese Coral Reef Society 日本サンゴ礁学会ニュースレター [2021年2月] Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.88
2021年2月11日発行

- 編集・発行人 / 日本サンゴ礁学会広報委員会
- 梅澤・座安・岨・田中(健)・中嶋・藤井(琢)・樋口・本郷・山本(将)・山下(洋)・湯山・和田
- 発行所 / 一般社団法人日本サンゴ礁学会 ●事務局 e-mail: info@jcrs.sakura.ne.jp Fax: 088-880-2284 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓬 185-1 一般社団法人日本サンゴ礁学会